



気象台ホームページ

北海道農産協会



令和3年度 水稻病害虫防除の チェックポイント

環境清掃と見歩き調査で いもち病 を抑えよう

水田周りの清掃を

- 本田では：
補植用の残り苗は早めに処分しましょう。
- 畦畔では：
代かき後にすくい上げた残さ物等のゴミは処分しましょう。



写真1 いもち病の病斑

早期発見のコツと薬剤防除(図1 参照)

- 水田内見回り強化時期
ブラスタム(BLASTAM, 北海道病害虫防除所)を活用して、効率的に見回りましょう。
(<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshos/>)
- いもち病菌の感染に好適な条件があった日の1週間後が、水田での初発や発生の増加が始まる日(=観察タイミング)です。
- 感染好適条件の多く出現した場合は、間隔を短くして調査しましょう。
- 葉いもちを発見したら、直ちに茎葉散布を実施しましょう。
- 見回り場所・方法
 - いもち病が発生しやすい地点
 - ・前年の発生場所
 - ・葉色が濃い場所
 - ・風通しの悪い場所
 - 10mを4か所程度、稻株をかき分け、下葉を重点的に観察しましょう。

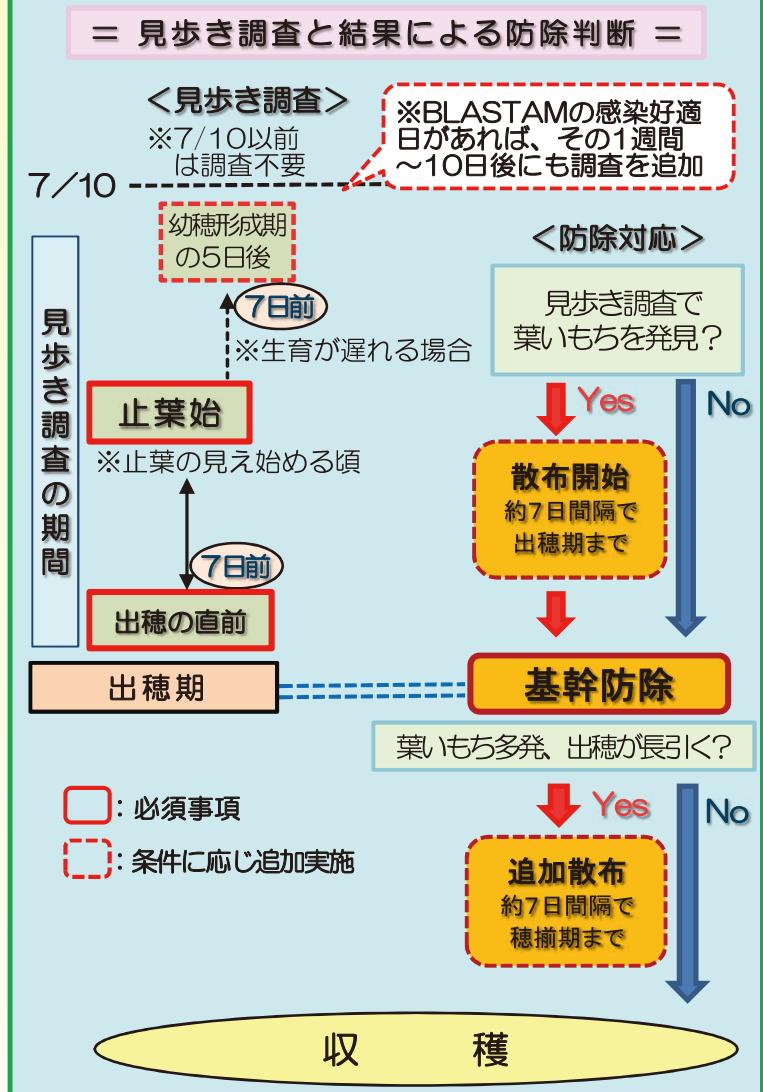


図1 いもち病の見歩き調査と防除体系

○いもち病の薬剤耐性菌に注意

- △MBI-D剤(デラウス剤)は道内各地で耐性菌が確認されています。防除効果が十分に得られていない水田では使用を控えましょう。
使用は防除ガイドに準拠しましょう。

- ◇QoI剤(メトキシアクリレート系: 嵐・イモチワース・オリブライト・アミスターなど)使用の注意事項
 - ①使用は年1回とし、規定量の処理を行いましょう。
 - ②体系防除は作用性の異なる薬剤と組合せましょう。
 - ③採種ぼでは使用を控えましょう。

早期抜き取りで ばか苗病の伝染を防ごう

- ばか苗病は撲滅が難しい病害です。
- 胞子が遠くまで飛散するため、水稻の種子生産に甚大な影響を及ぼします。
- 採種ほ場では、ばか苗病の発生がないことが定められています。

本田での伝染と処理方法

○本田での症状：徒長・黄化し、出穂期頃までに枯死します(図2の①、写真2)。株元には無数の胞子を作ります(図2の②、写真3)。

○胞子の飛散：胞子は数百メートル飛散するとされ、出穂・開花期の健全穀に付着すると、その穀は汚染種子として翌年の発生源となります(図2の③)。

○罹病株の抜き取り・廃棄処理等

□出穂までに、枯死前の罹病株を株ごと抜き取りましょう。

□疑わしい徒長株・黄変株も抜き取りましょう。

□抜き取った株は、ほ場外に搬出し土中に埋める等、適切に処分しましょう。



写真2 本田におけるばか苗病の発病株

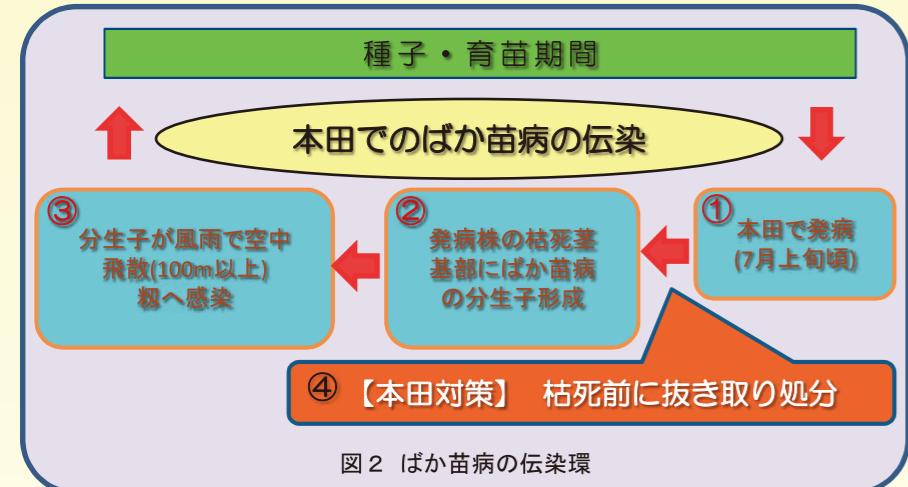


写真3 枯死株に作られた胞子

※採種ほ場周辺の生産者の皆様には、本田の巡回及び抜き取りに対するご理解とご協力を
お願いします。

イネドロオイムシ の防除と薬剤選択

○防除要否の判断：

1卵塊／株以下の密度では減収とならないので、「北の虫見板」(H10指導参考事項)を活用して防除の要否を判断しましょう。

○薬剤感受性の低下：

イネドロオイムシでは、過去に有機リン系、カーバメイト系で薬剤抵抗性個体が確認されており、近年地域によってはネオニコチノイド系及びフィプロニル系剤においても、薬剤感受性の低下がみられています。

○効果的な防除と薬剤選択：

抵抗性個体が確認された地域では、作用性の異なる薬剤によるローテーション防除を実施しましょう。その他の地域では、前年までの防除効果を再検討した上で、薬剤を選択します。



写真6 イネドロオイムシの食害葉

紋枯病と疑似紋枯症状(赤色菌核病)

- 昨年は夏季に高温となった時期があり、紋枯病の発生が目立っています。
- また近年は紋枯病防除が実施されていないほ場が多く、発生ほ場では伝染源の密度が高まっている可能性があります。
- 本年は夏季の気温がやや高く、降水量もやや多いと予報されていることから注意が必要です。

(R3.3.30 病害虫発生予察情報 長期予報より)

○紋枯病

高温性の病害で、茎(稈)を枯らします(写真4の①)。茎(稈)にできた菌核(写真4の②)がほ場に残り、翌年の発生源になります。近年、道内でも発生が増加しています。

○赤色菌核病

赤色菌核病は紋枯病と類似する病斑ですが、重症株罹病部が枯死し、稈が折損します。病斑上には黒い菌核は形成されず、収穫時期になると葉鞘の内側にオレンジ色の菌核(写真5の③、④)が形成されます。



写真5 葉鞘に形成されたオレンジ色の菌核(赤色菌核病)



写真4 紋枯病の病徵と菌核



紋枯病菌核

紋枯病・赤色菌核病の防除

○防除要否の判断

前年の収穫期に、ほ場で止葉葉鞘にも紋枯枯症状が見られた場合は、防除を実施しましょう。

○防除対策の選択

□赤色菌核病が発生したほ場は、「A 両病害に有効」を選択します。

□紋枯病のみ発生する場合は、「B 紋枯病には以下も有効」を選択します。

A 両病害に有効

育苗箱施用剤(略) または 水面施用剤(リンバー粒剤、モンガリット粒剤等)を使用

B 紋枯病には以下も有効

- ・茎葉散布も可能(無人ヘリ または 地上散布)
- ・薬剤(商品名)アミスター・アクタラSC またはモンカット・フロアブル
- ・効果の高い散布時期: 出穂20日前と出穂期の2回散布

農薬のドリフト防止の留意点

- 農薬の飛散(ドリフト)防止のため、粉剤の使用を避け、液剤や粒剤などで対応しましょう。
- 風のない条件での散布およびドリフト低減ノズル等の器具の使用を基本としましょう。
- 周辺に他作物や養蜂場がある場合は、薬剤散布方法・時間帯などについての事前連絡等に配慮しましょう。
- 農薬の散布はミツバチの活動が盛んな時間帯(午前8時～12時頃)を避け、早朝や夕刻に実施しましょう。



写真7 仔ドロオイムシの幼虫(上)と成虫(下)

モニタリングを利用したカメムシ防除

- 「出穂期」と「出穂から7日後」は基幹防除。基幹防除以降はモニタリング調査により防除の要否を判断しましょう。
- また、水面施用剤や残効の長い成分を含む剤を使用することで、防除回数の削減も期待できます。

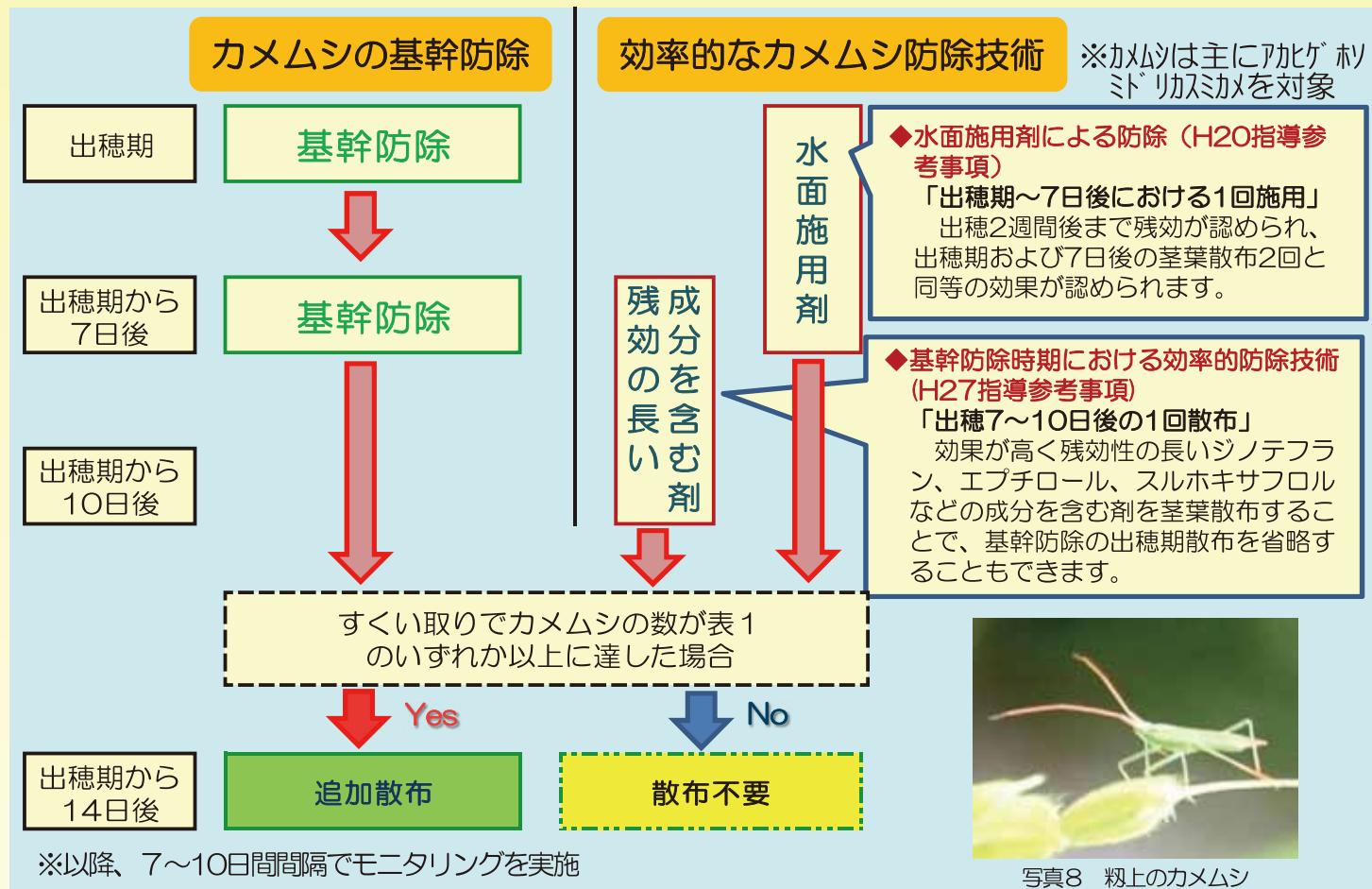


写真8 粽上のカメムシ



写真9 トラップ上のカメムシ

表1 割粒歩合ランクに対応した追加防除の要防除水準

割粒歩合 ランク	品種	要防除水準	
		20回振り すくい取り	フェロモントラップ [®] 捕獲虫数
少～やや少	きたくりん、吟風	3頭	
中	きらら397	2頭	2.2頭/7日間
多	ほしのゆめ	1頭	1.2頭/7日間

農薬の適正使用の留意点

- 農薬のラベルには製品名をはじめ、登録番号や有効成分名、製造元、最終有効年月日(使用期限)などが記載されています。
- 特に、農薬の安全使用に向けては、使用基準や使用方法、注意事項が細かく記載されており、これらは農薬の登録時に行われる作物残留試験結果に基づいた残留農薬基準等を超えないようになっています。
- 通常散布では登録されていても、有人ヘリコプター、無人ヘリコプター、速度連動式地上液剤少量散布機などの散布方法では、登録の無い場合もありますので、注意しましょう。
- 散布前は服装、使用器具などの確認・点検を事前にを行い、散布時においては接触や吸引を回避するよう心掛けましょう。
- 農薬の保管は、直射日光の当たらない涼しい場所に設置された鍵のかかる保管箱又は保管庫で施錠して保管します。特に毒物又は劇薬に指定されている農薬は、容器や包装、保管場所への表示等が法律で定められています。
- 農薬の空容器等は他用途には絶対に使用しないようにしましょう。示されている処理方法にしたがって適正に処理するようにしましょう。